

16 世紀末の七尾焼と 19 世紀後半の矢田窯跡

佐々木 達夫

九谷焼考古学研究会は 2005 年 3 月 13 日第 24 回研究会を石川県七尾市文化財資料整理室で開催し、七尾焼（仮称）と七尾城下町出土陶磁器、及び矢田（明星館）窯跡出土陶磁器を見学した。七尾市教育委員会の善端直が七尾城下町の発掘と出土資料について、石川県教育委員会の垣内光次郎が七尾で作られたと推定される陶磁器の研究状況について説明した。

七尾焼について

七尾城跡は国指定史跡となり、城下を含めた調査や整備が進められている。城下は 2 時期に分けられており、1 期は 16 世紀初頭から後半、2 期は 16 世紀後半から末頃と推定されている。出土した陶磁器は中国陶磁器や瀬戸美濃陶器などがあり、産地がそれらと異な

るとされる褐釉の皿や碗も少数ながらある。その褐釉陶器の形態は瀬戸美濃やその影響で誕生した越中瀬戸に類似している。素地は瀬戸美濃と明らかに異なり他産地と分類できるが、越中瀬戸に類似したものもあり、越中瀬戸と異なると思われるものもある。七尾の粘土と似た素地であり、七尾で作られた 16 世紀末頃の施釉陶磁器かどうか問題となり、越中瀬戸と別種類と分類できるかどうか話題となった。窯跡が七尾城や町跡周辺の山麓部で発見できれば、この問題はすぐに解決できるが、現在は窯跡が未発見である。16 世紀後半を中心とした穴水町の西川島遺跡や七尾市の小島西遺跡、金沢市の金沢城遺跡などの遺跡出土品のなかに、七尾焼と推定された陶磁器が含まれているのか、その比率はどの程度かを調査することで、七尾城下で施釉陶磁器が生産されたかどうかを推定する方法も提案された。

七尾城下の発掘では粘土採掘穴が発見されており、その中には土師器（かわらけ）焼成窯のかげらが入っていたことから、土師器（かわらけ）工房があったと

推定され、土器と施釉陶磁器の生産には大きな違いがあるが、土器職人の存在は越中瀬戸あるいは瀬戸美濃の職人や技術を取り入れる下地になったと推測できる。七尾市教育委員会が粘土採掘穴に残っていた粘土でかわらけ（土師器）を作り電気窯で焼成すると、七尾焼きの素地と類似したものとなった。1981 年に発掘調査された矢田窯跡の平窯跡から採集された素焼き陶器の素地も、粘土採掘穴の粘土に類似しているのは、同じ地域であることから当然と言える。七尾焼もこれらの素地と類似していることから、七尾焼が存在したことを裏付けるように思われる。ただし、越中瀬戸の素地もいくつか分類されるため、さらに比較検討が欠かせない。

七尾焼と推定された陶磁器は、混じりのある熔けきらない鉄釉が掛かる碗と皿である。碗は内面全面と外面腰部より上に釉が掛かる。皿は底部無釉すなわち内面中央部と外面底部が無釉となる。無釉部分は釉を削り落としたのではなく初めから釉をかけていない。褐色釉のなかには灰色が混じるものが多い。釉面に釉が無い小部分が見られるものと、釉がきれいに熔けたものがある。越中瀬戸は瀬戸美濃と造形の点で類似度が高いが、七尾焼は造形技術が劣り、厚手で轆轤削りも



図 七尾城下出土の七尾焼

（実測図は七尾市埋蔵文化財調査報告書 15 輯・七尾城下町遺跡七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書、1992 年から引用。）

粗い。釉は褐釉のみで当時一般的な灰釉がない。碗は瀬戸美濃の天目形を写し、皿は瀬戸美濃に一般的な小皿であるが器形は少し異なる。七尾焼には装飾がなく、皿には稜花、端反り、折縁がなく、内面装飾の印花や菊花弁なども見られない。かわらけ（土師器皿）に近い形態である。小皿は白く粗い粘土を目土として重ね焼きしている。碗は重ね焼きをしていない。碗の素地は赤みを帯び酸化焰焼成が主となるが灰色素地もある。素地にはやや大きい白い鉱物が見える。皿は灰色素地が主となり、赤色素地は見られない。皿は匣鉢内で重ねて還元焰焼成されたことがわかる。

碗が喫茶用の天目形であることは日常生活用よりも茶道という特殊な用途のために作り、短期間のみの生産と需要に限られ、産業として引き継がれないことを思わせる。瀬戸美濃の大窯 3 期に類似する器形であり、その影響を受けていることを示す。生産の時期は前田が能登へ入った天正 9 年 (1581) 以降と推定することが可能であるが、前田は天正 11 年 (1583) に金沢に移る。七尾焼は織豊政権大名となった前田家と瀬戸美濃の陶磁器産業の関わりを示すが、前田が金沢に移って七尾焼が廃止されたのであろうか。当時一般的に使用され

ていた小皿を作り、その質が中国白磁や瀬戸美濃さらに越中瀬戸の小皿よりはるかに劣ることは、短期間のため職人の質が悪く、他地域に製品が流通していないことを思わせる。

矢田窯跡について

矢田窯跡は 1981 年に素焼用平窯跡 1 基が発掘された。長さ 3.7 m、幅 2.1 m、中央部が深く 1 m 下がり、焚き口とその反対側がほぼ同じ高さとなる。1980 年に発掘された九谷焼松山窯跡の平窯跡と比較し、室内が窪むことが特徴で、中央部で 1 m の深さとなるレンガ積みロストルがある。焚き口側の半分にはロストルが無く、反対側のみにある。小さく深いため、単室平窯とダルマ窯の折衷形態であろうか。中央部の窪みには炭灰が堆積し、ロストルの間の焰路から碗、鉢、徳利、片口、蛸壺などの素焼き片が出土した。周辺の排水溝から少量の黒褐釉陶器が出土し、灰釉も見られた。発掘された平窯跡に隣接して登り窯跡もあったが瓦窯跡と言われていた。以前この地に真言宗寺院明星館があり、寺院が窯を経営した可能性があるが、その伝承すら残っていない。



図 矢田平窯跡と出土素焼

(実測図は土肥「矢田窯跡」(「中世・近世」『新修七尾市史 1 考古編』2002 年、449-450) から引用。)